1997.2.20,
第102号

編集・発行
福島県教育庁
会津教育事務所
加藤征男
編集協力
北会津・耶麻・両沼
地教委連絡協議会
小・中学校長会

「前」と「前へ」

福島県教育庁会津教育事務所次長（業務担当）
兼生涯学習課長　齋藤就治

昨年末だったと思うが、NHKTVのある番組で、明大ラグビー部の北島監督（故人）を特集していた。

中身は言うまでもなく北島監督の有名な教えである「前へ」という言葉の与えた影響についてである。北島監督の「前へ」という教えは、明大ラグビー部の勇姿とともにあまりにも有名であり、監督の生前・没後を問わず、数多く取り上げられてきた。

しかし、私が、今回の番組に興味を引かれたのは、過去に取り上げられた多くの内容と、多少ニュアンスの違いがあったからである。それは、北島監督の教え子達すべてに「前へ」という教えが、生きていく指針になってきたのだろうか、という疑問にも視点を当てていた点にある。勿論インタビューを受けた教え子達は、困難に行き当たったとき、この言葉をよりどころとして生きてきたし、また、これからも生きていこうとする誇りに満ちた肯定的な感想や意見が大半を占めた。

ところが、過去部員であった一人は「前へ」という教えが、彼の人生にとって大きな重荷となり、その意味を問い続けてきたと言うのである。

彼は、明大ラグビー部に憧れ入部したが、練習についていけず合宿所を逃げるように出た。以来、五十代を迎えるまで、大学時代に果たせなかった「前」や「前へ」の意味を考え続け、五十代に入って明大ラグビー部に退部の意志を告げに行った過去を持つ。

考えてみると、今までの日本は「追いつき追い越せ」や「物質的豊かさ」という言葉に象徴されるように、国民の多くが、目標としての「前」が確実に見えていたと思っていたし、そういう時代には、「前へ」という教えが、スポーツを越えたすべての教えとして存在し得たのかもしれない。しかし、多くの人が信じていた「前」を、現在の時代の流れや社会の変化の中で考えてみる時、本当に「前」として存在していたのかどうか難しい問題である。

私たちは、ややもすれば、時代の流れや時代を代表する言葉、数多くの提言などを、ある面のみの評価で受け入れる傾向がないとは言えない。まして、それに権威の裏付けがあれば尚更である。

「物事には、必ず、光と陰がある」とよく言われるが、「前へ」という言葉に憧れて入部、そして挫折し、五十代を迎えて明大ラグビー部に退部の意志を告げに行った人の生き方も、「前へ」という言葉のすばらしさとともに、また、考えてみる必要があるように思う。

受賞おめでとうございます

（敬称省略）

○文部大臣表彰
- 地域文化功労者　阿部　孫一
- 社会教育功労者　元会津高田町社会教育委員会議長　元木　慶次郎
- 優良PTA　会津若松市立鶴城小学校父母と教師の会
- 体育功労者　会津サッカー協会会長　廣木　謙
- 会津若松市ソフトボール協会
- 学校保健関係功労者　猪苗代町立長瀬小学校歯学校歯科医　佐藤　熊亀
- 学校安全関係優良団体　会津若松市立双葉小学校
- 学校保健調査　会津若松市立一箕中学校
- 第四十回よい歯の学校コンクール　三島町立三島小学校

○県教育委員会表彰
- 地方教育行政功労者　前湯川村教育委員会教育長　芦澤　寛治
- 社会教育関係功績顕著な施設・団体　昭和村青年会　喜多方市第二婦人会
- 芸術文化財保護功労者　会津美術協会顧問　鈴木　亮平　熱塩加納村文化財保護審議会会長　佐原　義春
- 福島県健康推進学校優秀校　会津若松市立東山小学校
- 保健体育功労者　会津高田町立永井野小学校
- 保健体育功労者　会津若松市立東山小学校歯学校医　前田　耕一
- 保健体育関係功績顕著な団体　会津水泳連盟
- 第四十回よい歯の学校コンクール特別栄誉賞　会津高田町立高田小学校
- 特別優秀校　三島町立三島小学校
- 優秀校　喜多方市立第一小学校　塩川町立塩川小学校　高郷村立高郷第一小学校　塩川町立塩川中学校
- 学校安全優良校　会津若松市立松長小学校

○学校給食会表彰
- 学校給食優良団体　会津若松市立東山小学校
- 個人表彰　蒲生小学校主任栄養士　本多　マス　永和地区給食センター主任労務主査　渡部　久子　湯川村学校給食共同調理場　一条　英代　猪苗代町立翁島小学校主任調理士　笠間チヨ子

○学校林活動・環境緑化コンクール
- 学校林活動の部県知事賞　西会津町立野沢小学校
- 学校環境緑化の部県知事賞　会津高田町立高田小学校
- 同　県緑化推進委員会長賞　会津若松市立大戸小学校

特色ある学校紹介

「外国人生徒適応指導のあり方」
―日本語教育を中心として―

会津若松市立一箕中学校

本校には四人の外国人生徒が在籍している。文部省より平成七、八年度「外国人子女教育研究協力校」の指定を受け、生徒がよりいきいきと活動できることを目標に研究を進めてきた。外国人生徒を対象にした日本語指導と進路指導、それに全生徒を対象にした国際理解教育の三つを柱として理論研究と実践を行った。その結果、明らかになった主なことは次のとおりである。

一、外国人生徒に必要な力は国語力ではなく日本語力であること。生活日本語と学習日本語の違いを明確にして指導していく必要がある。

二、考える力は母語で養われること。第二言語を習得する過程で、母語を忘却させない手だてが不可欠である。

三、日本語教育担任のカウンセラー的役割が重要であること。外国人生徒が担当教諭に自分の悩みを、日本語を使って懸命に伝えようとしていたが、その過程において日本語が上達したことは見逃せない。

四、外国人講師の講演が、国際理解のための効果的な間接体験となること。異なった考え方を認識することは、異質なものを排除する意識を薄れさせる。これは、差別からのいじめ問題解決にも結びついていくと考えられる。

今回、研究を進めてきて、「共生」を意識した国際理解教育の充実を図っていきたい。コミュニケーション活動の重要性が再認識された。今後も

心に残る人々

会津高田町教育委員会教育長
小川盛夫

青年時代、部活動の指導が終わってほっと一息、各々職員室の大きな箱火鉢を囲み、汗を拭きながら茶を飲み、出てくる話題は部活動、生徒指導、学習指導の諸問題など、毎日さまざまな面から口角泡を飛ばす。

これは全くの雑談で司会もなければテーマもない。時間的制約もなく拘束されない。先輩から「お前達の指導は何やっている。教えることだけが授業ではない。」など時には厳しい忠告も飛び出す。

門松を多く潜った先輩の指導は実に的を射たものである「教師は授業に命をかけて勝負する。いつでも俺の授業を観に来い。」をはじめ、人間の生き方や、先輩に対する言葉遣いから、盃の持ち方まで教えられたものである。

今考えると、私は後輩に胸を張って「俺の授業を観に来い」と自信を持って言ったことが何回あっただろうか。思い出すと恥ずかしくなる。今は亡き先輩に頭が下がると同時に忘れることのできない、心に残る一つの言葉である。

現在はこのような先輩、後輩のつながりはどうだろうか。生活様式の変化で火鉢などは姿を消し、ひざを寄せ合う場と機会が薄れてきた感じがする。

基礎学力向上を目指して
～「基礎学力に関する状況調査」より～

基礎学力向上への対応については、推進地区を中心に、各学校で全職員の共通理解のもとに地道な実践がなされてきている。このことは、九月二十日現在の「基礎学力向上に関する状況調査」（会津教育事務所管内）の結果からもうかがえるので、その集計結果を次に示しておく。

一　基礎学力向上自校プランの作成状況について

(一) 作成している、あるいは作成中である　一三校…一〇〇%

二　基礎学力向上のための指導方法の工夫・改善

(一) ティーム・ティーチング

① いくつかの教科で実施　七校…五四%

(二) 問題解決的学習

① 全教科またはいくつかの教科で実施　一三校…一〇〇%

(三) 習熟の程度に応じた学習

① 全教科またはいくつかの教科で実施　一〇校…六六%

(四) 指導方法改善の具体的な実践例

・観察や実験等体験的な活動の取り入れ
・思考力や表現力を育成する話し合い活動の取り入れ
・地域素材の教材化や人材の活用
・一人学習のための「学習の手引」の作成
・グループ学習やペア学習など学習形態の工夫
・板書の工夫や発問の工夫
・ドリルの時間やまとめの時間の確保
・自己のよさに気づくような自己評価や相互評価の工夫
・個に応じた指導のための個人カルテや座席表の活用
・授業外におけるドリルの時間の設定や家庭学習における個に応じた課題の設定

これらのことから、児童生徒主体の学習が進められ、個に応じ、個を生かすための工夫がなされてきていることがわかる。

最後に、各学校では、新しい学力観に立った基礎学力の向上の意義を正しくとらえ、プロセスを重視することはもちろんであるが、結果も大切にしていくように努めていただきたい。知識、理解、技能なくしては判断や表現はできないのだから。

わたしの実践

算数

「数理のゲーム化による話し合い活動の活性化（六年）」

会津若松市立謹教小学校　樋口　真也

数学的思考力と数理的処理のよさを理解し生かそうとする力は、算数科における「生きる力」を育む大きな柱である。この力は、比較検討をする活動の充実によって育成されると考え、「ゲーム化を通した話し合いの場の多様化」をテーマとした授業実践を行った。

「比例」の学習では、伴って変わる二量について、児童は「燃料と車の走る距離」などさまざまな事象を考え出した。その学習をもとにして、「日常事象の仲間わけゲーム」を実施した。班ごとにめくったカードの事象について、規則性があるかないかを話し合い、仲間わけをするゲームである。話し合いの場を、班・ブロック・全体の三段階にして比較検討させた。

これまで消極的だった児童も気軽に進んで発言し、自らの手で話し合いを進めることができた。楽しそうに課題追求をする様子を見ていると、児童は本来、知的好奇心旺盛な存在であるということがよくわかる。

理科

「実験操作の意味を考えさせる指導」

喜多方市立第一中学校　星　裕次郎

観察・実験は理科学習の要であるが、ただ体験させればいいというものではなく、必要な技能を三年間を見通して段階的に捉え指導していく必要がある。その際に、知識や技能を生徒自ら主体的に獲得できるように「なぜ、そうするのか？」と考えさせ、実際の操作を通して気づかせる指導を継続して行ってきた。

第二学年で化学変化を扱った際、ふくらし粉の熱分解を単に教師の説明によって行わせるのでなく、教科書を模倣して計画を立てさせる中で、実験方法に関する五つの疑問を提示し、操作の意味を考えさせ、自分の考えを持たせた上で取り組ませた。また、鉄と硫黄の化合実験では、ワークシートで反応前後の物質の性質を比較する方法を考えさせてから行わせるなど、探究の方法を獲得することに重点を置いた指導をしてきた。昨年度の器具の操作の習熟を基礎に、今年度はさらに操作の意味を自ら考えたことによって、生徒たちは実験の目的を主体的に把握し、見通しを持って考察まで積極的に学習を進めることができた。

この学習を通し、生徒は実験の目的や方法をきちんと理解して取り組むことの大切さや、自分たちの力で解決していく喜びを感じ取っていたようである。今後は、実験方法や自作装置なども生徒自身に工夫させていきたい。

地域に学ぶ

会津仏教文化の源
―史跡慧日寺跡―

磐梯町教育委員会文化課　白岩　賢一郎

昨年春、湯川村勝常寺の薬師三尊像が本県では実に四十年ぶりの国宝に指定された。会津では二件目、県内でもわずか三件目にすぎず、ことに仏像に限ってみれば、東北地方では最初で唯一の国宝ということになる。

この優れた技術が示すとおり、会津地方への仏教文化の伝播は古くなおかつ高尚である。その中でも、長く会津仏教史の中核を担ってきたのが、磐梯町にゆかりの慧日寺であった。

平安時代の初め、学僧徳一によって磐梯山麓に開かれて以来、実に千年を越す長きにわたって仏都会津の礎を築いてきたのである。

明治初年の廃寺の後、寺跡は昭和四十五年に国の史跡に指定され、現在約十五万平方メートルが貴重な文化遺産として保存されている。町では今、その積極的な活用を目指して史跡の環境整備に取り組んでおり、昭和六十年度からの発掘調査成果をもとに近い将来にむけて、一部伽藍の復元も検討されている。また、史跡の傍らに建つ磐梯山慧日寺資料館は、昭和六十二年の開館以来、県内外から六万人を越す入館者を数えているが、このことは慧日寺文化への高い関心を物語っている。

平成九年には開館十周年を迎えることから、展示運営のより一層の充実を図るとともに、史跡整備と相まって会津仏教文化の源として地域教育の拠点作りを目指している。

私の抱負

生きている学校に

金山町立横田小学校
校長　赤城孝三

学校に入っただけでその校風を知ることができるといわれている。四月に着任し、私を迎えてくれた子供の明るい表情での挨拶が私に新たな決意をさせた。

生きている学校には、子供の目の輝きと目当てを持って進んで取り組む姿がある。

そして、教育愛に燃える職員の姿がある。専門職としてのそれぞれの個性と力量の発揮を願っている。

活気に満ちあふれ、生きている学校作りの実現へとさらに努めていきたい。

新任教頭の流行語

北塩原村立檜原小学校
教頭　齋藤茂幸

昨年の流行語大賞は「長嶋監督の「メークドラマ」であったが、私たち新任教頭の間の流行語大賞はといえば、会津教育事務所加藤所長さんの「学校を三百六十度見渡せる教頭であれ。」に決まりのようである。

赴任したばかりのこの檜原小学校は、本年度限りで閉校になる。現在、学校を見る自分の視野は決して広いとは言えないが、学校の最後の日までには三百六十度じっくりと見渡せるように残りの日々を大切に過ごしたいと思っている。

子供たちの力を信じて

会津坂下町立八幡小学校
教諭　原田和雄

始業式で三年の担任として私の名前が発表された時の子供たちのうれしそうな表情と自分の中にこみあげてくる喜びは今でもはっきりと覚えている。

二学期まで無我夢中で過ごしてきたが、教材研究を子どもに寄り添ってどう進めるか子どもたちの手で学習しやすい環境をどう作り出せるかなど、悩みは多く、つきることがない。

温かく見守ってくださる周りの先生方に感謝しつつ、子どもの力を信じてこれからも進んでいきたい。

私の作品

「大きな魚をつかまえた七匹の子ねこ」
三島町立三島小学校
一年　二瓶祐也

物語　雪わたり
会津本郷町立本郷第二小学校
五年　浅野昇平

生涯学習だより

猪苗代町のボランティア活動

猪苗代町教育委員会生涯学習課
派遣社会教育主事　齋藤賢一

一　ねらい

「若い力で美しい町を作りましょう」という町民憲章の具現や青少年のボランティア活動意識を高めるため、「美しい環境の保護と青少年の健全育成」をねらいとし、ボランティア活動の開発をすることにした。

二　組織

小・中・高校を含む十五の団体でボランティア推進会議を組織した。

三　活動内容

(一)　ボランティア活動に関する意識調査
(二)　自然環境保護と水質汚濁に関する意識調査
(三)　子供を対象にした毎月一回の絵本や紙芝居エプロンシアターの読み聞かせ
(四)　町内街角等の花のプランター設置
(五)　猪苗代町特別養護老人ホーム訪問
(六)　全町一斉水質調査

○『水質探険隊を結成』

町民のボランティアを募り、水質検査を行うことによって、水環境の保護への意識と環境ボランティアの意識の高揚を図る。

○『猪苗代町水質マップの作成』

水の汚染は生活配水が原因であることが判明した。そして、水質マップを作成し町民に配布した。

四　今後の課題

ボランティア活動を提供する者もされる者も、ボランティア活動をするならば『公民館』にいけば分かるという活動の拠点を設けることである。